六九　御役人直言上之儀被仰出

萬端御役人共直に言上可仕を、あなたこなた持廻り、透と間違申候。御役人共之身に仕候ては、人につかはれ可申よりは、御直之御奉公本望可奉存所、左様無之候は、所詮忠義之勵無之者に候間、向後急度可被及御沙汰候。此旨惣様江御内意之趣可申聞置候。油斷候ば火急に曲言に可被仰付者可有之旨、被仰出候事。

(元祿十五年)壬午五月　日

七〇　諸頭・諸奉行之心得に付被仰出

諸頭・諸奉行共之內、組幷支配之者共を身に懸介抱仕儀は、奉公之至極に候得共、御爲に替申者共有之候。ヶ様之儀は却て不忠之者与被思召候。若私を立申者共、拙者共より內證申聞覺悟相改候得ば、一段之儀に候。若此筋難心得候ば、左頭・奉行共近年此筋江參候儀、御書立を以可被仰出候。左候はゞ申分立申間敷候。若其筋得心不仕者、役儀被仰付置候ては、第一御仕置之害に罷成候。

(寶永七年)十月十五日

七一　他國江發出前勤番之儀に付被仰出

前々以來他國江被遣候者共、發出前勤番等爲引候旨達御聽候。御近習之者など御發駕之日迄相勤、又御着城之日より(マヽ)相勤候。表向之樣子不宜候。此以後何れ之組にても觸事共儀出候はゞ、必至与御咎可有之候。

朱書。右正德四年三月八日、御家老衆を以諸組頭江被命。是より先御小將組は歸着之後十日、御馬廻等は廿日休日有之候。此度之命により、御徒組等までも休日といふ事なし。

七二　諸色高直之儀に付被仰出

御領國中諸色、近年段々高直に罷成候。此儀諸國共同事之躰に候得共、御領國之儀は惣而古來米直段他國より下直に付、諸物も准之他國より下直之所、近年諸物之様子結句諸

國よりも高直に候。被召上候物之直段も同事にて、大分之御費、御家中之者及難儀候。町方・御郡方裁許之面々之儀は、其所之町人・百姓潤候を心懸可有之は勿論之事候得共、御領國にて出來之品、他國より來候諸物共、直段を引揚賣出、或莫大高利を取候儀も、其所之潤と迄相心得、御費等之考も無之、其分に仕置候躰に相聞え候。向後急度僉議有之、諸色下直に成候樣沙汰可有之候。

一、前々より他國江出候儀成不申御制禁之品々も、何と有之候ても密々に差出候沙汰有之候。ヶ様之儀故、猶更其品々も次第に高直に罷成候。急度吟味可有之處、油斷成儀に候。左様之族は御仕置に被仰付、見懲に罷成候樣に可被仕候。且又御停止之品々は不及申、其外諸物茂、先年よりは他國江遣候手廻宜候故多遣し、御領內に用候分致拂底候に付、自高直に成候躰に候。左候得ば、假令御制禁之品々にて無之候共、左様之所僉議有之、過分に他國江出不申様に可被仕事。

一、所々奉行之家來、又は手先小役人、或十村肝煎等、町人百姓と馴合、私曲ヶ間敷儀共有之様子候。依之買置等仕、或は御停止之品々等他國江洩候儀も、奉行人江押隠、不届成事共不相知躰に候。家來等之內、左様之品脇より相知候はゞ、其主人別而越度に可罷成候條、隨分吟味可有之事。

一、右小役人等、其支配方之諸物不因何品、之者(其者カ)之手前江賣候物は格別直段下直に仕、或直段相極候品は夫々分量を多遣候由。既に木呂など、棚仕候內にも善悪を仕置、宜棚をば引棚と名付、支配方江遣候様に積置、不宜棚をば平賣仕候旨、先年より及承儀に候。都而商賣物、善悪に因て代銀高下有之は格別、同直段にてヶ様之儀依怙贔屓仕候段、畢竟賄賂之筋に候。不限是何等之品にても、皆以ヶ様之趣相聞え候。然共可爲其役人者、其仔細を乍存、其通買求候儀は、決て有之間敷儀に候處、不屆至極之儀に候。其故外江賣出物に、右損料をも懸、高直に仕躰に候。左様之族有之ば、急度吟味有之尤候。

一、近年町人・百姓等、言外華麗に罷成、萬事に付奢之儀共多、侍中江對し候ても慮外之仕形候。ヶ様之儀も其分に仕置、制止無之段不念成儀に候。向後急度可被申付候。以上。